

房総の郷土史

第 42 号



「外房・御宿海岸」

2014年

千葉県郷土史研究連絡協議会編

嶺岡牧の野馬土手

日暮晃一

一緒論

江戸幕府直轄四牧の一つである嶺岡牧は(図1)、明治維新後も地域ぐるみの畜産会社の牧として、嶺岡畜産会社が解散する明治四三年まで続いた。そのため、第二次大戦後も、地域会社の経営資料として嶺岡牧に関する記録が多く残されていたし、記憶している人も多かつた。金木編(一九六一)は、そうした記録を、主に技術面から丹念に整理するとともに、現地調査および面接聞き取り調査をまとめ、嶺岡牧の姿を詳細に記述している。しかし、それ以降嶺岡牧に対する歴史研究は少なく、町史・市史で取り上げている以外は、江戸幕府直轄牧時代の姿を記した小笠原・川村(一九六七)、青木(二〇〇五)、考古学的な事実記載を中心とした小高(二〇〇六)、古文書の調査から江戸幕府直営牧経営に係わる社会に迫った大谷(二〇〇九)が、主要な嶺岡牧研究としてあげられるに過ぎなかつた。こうした研究の遅れにより、今回調査を行うまで嶺岡牧の形状さ

え分からぬ状況にあつた。嶺岡牧の範囲は、小高(二〇〇六)が二万五千分の一の地図に記入しているが、牧の範囲と判断した根拠がどこにも明記されていないため、科学的研究の資料として用いることができない。このことは同時に、嶺岡牧という歴史遺産を活かした町づくりを行いたくとも、何をもつて嶺岡牧の範囲としているのかが不明なため、この図を嶺岡牧の利用・整備のための基礎データとし

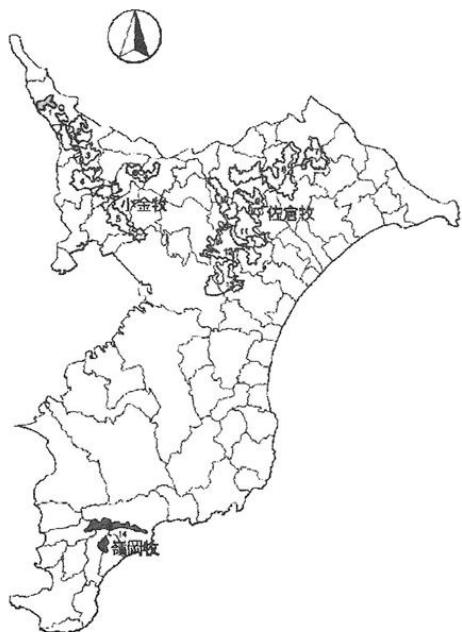


図1 嶺岡牧の位置 (小久賀2006, p.10に加筆)

て使うことができないことをも意味する。

鷺岡牧が所在する鴨川市及び南房総市は、千葉県の政策で歴史資源等を活かした観光都市にする地域とされている。現在、地域の歴史遺産の活用・保全は、偶発的、保護目的、点的、固定的、非日常的、官経営型で行われているが、持続的地域再生の資源とすること前提とした場合、計画的、利用目的的、一環的、

暮らし創造的、日常生活的、住民主導経営型、の利用・保全へとシフトすることが求められる。そうした新しい歴史資源の利用・保全システムを進める手法として遺跡キャラクターマップ法を開発し（日暮ほか二〇一二）、二〇〇六年に千葉県レベルの遺跡キャラクターマップを、そして市町村レベルの遺跡キャラクターマップとして二〇〇七年に鴨



図2 鴨川市の遺跡キャラクターマップ

川市民と鴨川市遺跡キャラクターマップを作成した（図2）。その結果、嶺岡牧が人の住まない山岳地域を除いた鴨川市の遺跡キャラクターであることが明らかになった。したがって、嶺岡牧を活用した地域再生は、鴨川の将来を左右する中心的な命題となつた。しかしながら、嶺岡牧の利用を核とした地域再生を進める上で基礎となるデータがないことから、まずは基礎データの整備から始めることとした。

基礎データ整備のための調査研究の最初に、全ての原点になる嶺岡牧の範囲を地図上で捉えることを目標に設定した。嶺岡牧の範囲を捉える方法として、ここでは現地調査により、草地を囲う野馬土手の分布を捉えることとした。なお、草地を囲う野馬土手の分布を抑えるのにGPSを用いた。それは、嶺岡牧がつくられている所は千葉県の背骨に当たる山地地帯で人家もほとんど無いため、二万五千分の一地図より大縮尺の地図が作られておらず、しかも荒れた山林のため野馬土手の存在を確認しても正確な位置を地図上に落とすことができないことにによる。

本稿では、その調査成果をまとめ、野馬土手の分布から嶺岡牧経営に接近することとする。

二 野馬土手の分布

二〇一〇年度から三ヶ年かけて行つた、野馬土手分布調査の結果をとりまとめたのが図3である。

本調査を開始する以前は、牧を囲う大土手に当たる野馬土手が存在することは知られていたが、その分布は確認されておらず、青木（二〇〇五、p.72-73）では嶺岡牧に残された野馬土手の総延長はわずか一・九kmに過ぎず、小金牧が二一km、佐倉牧が四三kmの馬土手が残つているのと比べてあまりにも少ない長さであること、しかしながら嶺岡牧は小金牧の面積の十分の一なので同程度の残り方と記している。しかし、今回の調査で、青木（二〇〇五）の約二〇倍に当たる総延長三六kmの野馬土手を確認することができた。このことは、嶺岡牧の外周の半分にあたる野馬土手を確認したと言い換えることができる。野馬土手は、連続して構築されているように思われてきたが、実際は小さな沢の右岸と左岸では野馬土手が一〇〇m以上ずれることがしばしばあり、何回か調査で訪ねながら分からなかつた対岸の野馬土手が、馬の水飲み場遺構の確認調査の時に発見されたり、現地見学会の準備で樹木を伐採し下草を刈つたら確認されたケースも何回か経験した。このことから、現在なお未確認の土手がかなり存在するものと考えられる。これまで嶺岡牧の野馬土手は地滑りにより失われたとこ

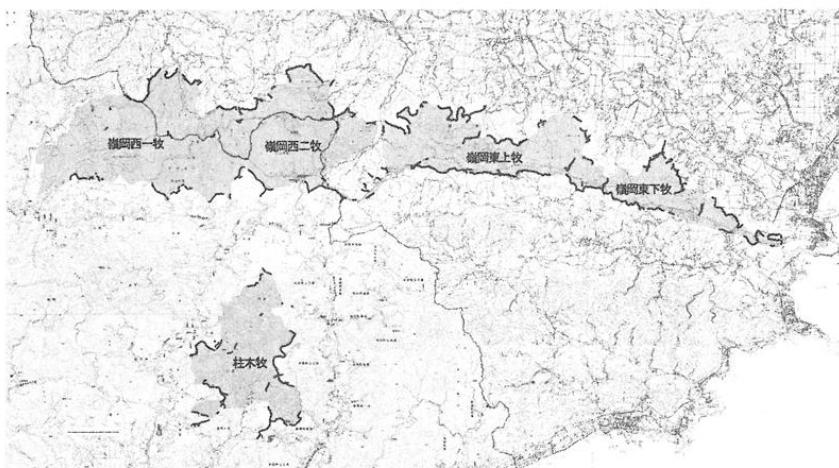
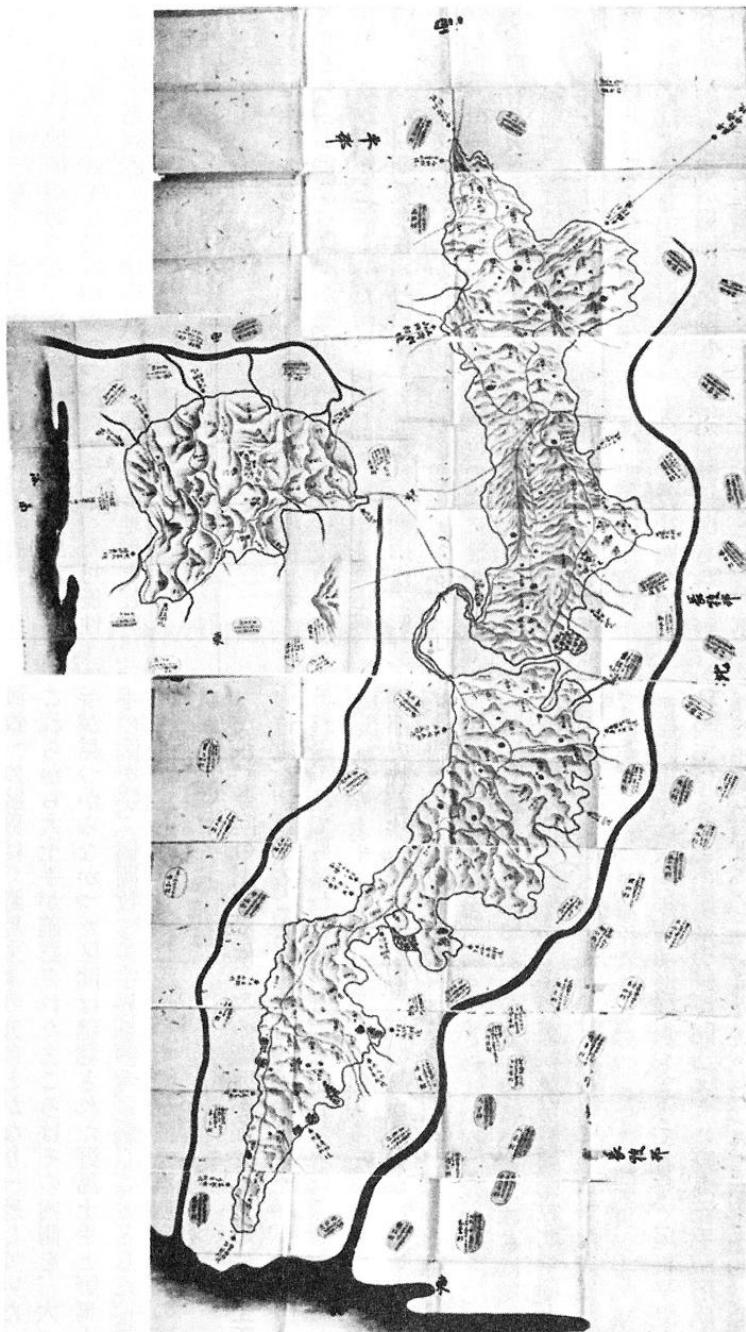


図3 嶺岡牧における野馬土手の分布とそれに基づいて推定した嶺岡牧の範囲

図4 「房州峯岡山野絵図」、「房州朝夷郡柱木野絵図」に描かれた嶺岡牧(石井家文書)



ろがかなりあると見られてきた。しかし、小規模な斜面崩壊ではなく地滑りをおこしている嶺岡東牧南面で野馬土手が連続している一方で、嶺岡西一牧、柱木牧で野馬土手が確認できない地域があつた。柱木牧は、崖のため野馬土手をつくらなくともすむ場所が多かつたためであつた可能性が高いが、嶺岡西一牧の地形は、嶺岡西二牧の地形と変わらない。それにも係わらず野馬土手の分布が少ないのは、牧の外周を野馬土手ではなく垣根で区画した可能性を検討する必要がある。

大土手に相当する野馬土手の分布を基本に、牧の形状を推定すると、綿貫夏右衛門が徳川吉宗の命を受けて嶺岡牧を再興するか否かを調査した時に提出した「房州峯岡山野絵図」と「房州朝夷郡柱木野絵図」に描かれた嶺岡牧（図4）の姿と似ている。しかし、山と山の位置の方位がずれているし、嶺岡東下牧が幅広く嶺岡東上牧の南に描かれるなど、違ひも大きい。絵図はあくまでもメンタルマップの域を出ておらず、野馬土手が欠けている区間の牧範囲を推定する資料としては役立たない。同様に、今回の現地調査の前にしばしば取られていた方法として、明治に作られた速図に印されている土手、垣根のマークから牧範囲を推定する方法があるが、嶺岡牧に関しては迅速図に印された野馬土手の位置が現地調査の結果とずれていることから、迅

速図を現地調査で野馬土手を確認できなかつた区間の牧範囲を推定する資料に用いることはできない。一方、字「嶺岡牧」の字界は、野馬土手の分布とかなり一致していた。これらから大土手が確認されたところはその内側を、大土手が見つからなかつた区間は確認された野馬土手と野馬土手の間を字「嶺岡牧」の字界を参考に繋ぐこととした。これにより、東に行くにしたがつて幅が細くなる嶺岡牧の形状が捉えられた。

なお、今回の調査では、牧の範囲を捉えるために大土手の位置を押さえることに専念し、追い込み土手・仕切り土手がみられても追わなかつた。しかし、現地調査で見られた追い込み土手・仕切り土手の一部から、嶺岡東下牧の東端部で牧が仕切り土手に囲まれて細かく分かれているように、村落単位で牧が仕切られていることが想定された。

三 野馬土手の立地

嶺岡牧の野馬土手は、嶺岡東牧及び嶺岡西牧北半部と、柱木牧及び嶺岡西牧南半部で、造られている立地が異なつていた。

嶺岡東牧は、老年期地形に入つてきており、尾根平野を持つていて、この尾根平野を囲うように野馬土手が形成されている（図5）。とりわけ、緩やかな斜面の北縁は、低地

近くまで牧の範囲になつてゐる。

一方、柱木牧及び嶺岡西牧南半部は、山頂に平野を持たず、急斜面からなる山地地形をなしてゐる。この頂き部に野馬土手がつくられ、野馬土手が谷を取り巻く形になつてゐる(図6)。

嶺岡西牧北半部の山頂周辺は、平野のない山地地形だ

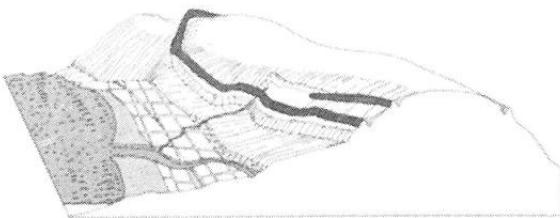


図5 嶺岡東牧での野馬土手形成位置

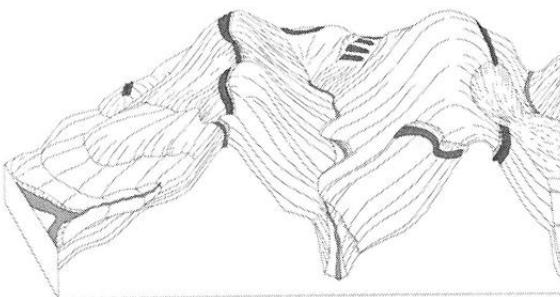


図6 柱木牧の野馬土手形成位置

が、山頂から一〇〇mほど下つたところに痩せ尾根が樹枝状に広がる丘陵地帯が広がつてゐる。野馬土手は、この丘陵の尾根平野を囲うように形成されている。

このことは、尾根平野を放牧地とする嶺岡東牧と、尾根に囲まれた谷地を放牧地とする柱木牧と、放牧地利用方式が真逆であることを示してゐる。蛇紋岩地帯で、丘頂部が湿地となつておらず、牛馬の水飲み場が高所にある嶺岡東牧では、尾根平野を放牧地とすることが適してゐる。これに対して、柱木牧は、泥岩からなる山地で、高所には水が無く、牛馬の水飲み場は谷底に流れる河川までおりてくる必要がある。この違いが、尾根を放牧地とするのか、それとも谷を放牧地にするのか、という違いをもたらしたものと考えられる。

四 野馬土手の形態

今回の調査により、嶺岡山に形成された牧の野馬土手と、柱木牧の野馬土手で、形態上に違いがあることが判明した。

(二) 嶺岡山の牧の野馬土手

嶺岡山に形成された牧の野馬土手は、基本的に丘陵斜面の上位を等高線に沿うように掘つて堀を作り、下位の堀横

に掘つた土を積み上げて土手をつくり出している。嶺岡西一牧にこれとは形態を異にし、柱木牧で見られる形態の野馬土手があるものの、これは特殊例に過ぎない。

嶺岡山につくられた野馬土手は、形でなく、野馬土手の素材、とりわけ石をどこに、どのように使うかによって次のようにタイプ分けすることができる(図7)。

①土盛り…土を盛り上げて土手を築いた野馬土手。

②砂利盛り…砂利

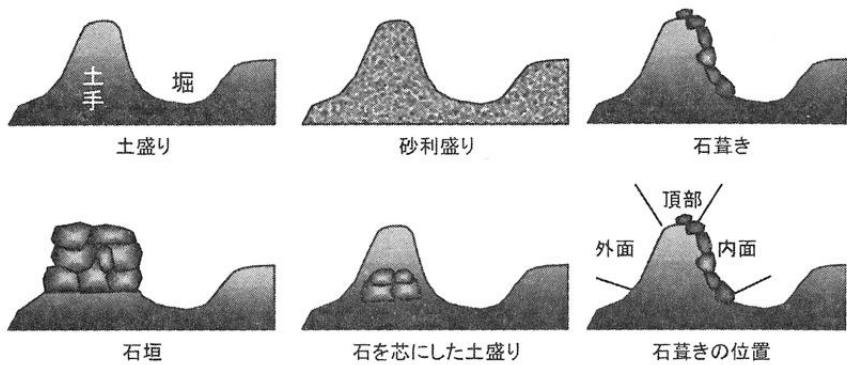


図7 嶺岡山の野馬土手

を盛つて築いた野馬土手。

③石垣…石を積み上げたもので、土の割合が低い野馬土手。

④石葺き…土を盛つて土手を築いた上に石を並べた野馬土手。

⑤石を芯にした土盛り…石を並べて芯にし、その上を土で覆つた野馬土手。一部の土が流れ芯の石が見えた場合確認できるが、外観からは土盛りとの区別がつかない。以上の内、土盛りと砂利盛りは、そこが土だつたのか、それとも泥岩や砂岩が風化して地表部が砂利層だつたのかという野馬土手を築いたところの土壤学的な相の違いに基づくもので、野馬土手構築の思考方法は同じと見られる。これに対し、石をどのように使うかは、掘つて積むという行為と異なる動きをしなければならない点で、野馬土手構築方法の思考方法が異なる。石を用いた野馬土手の多くは、土盛りした野馬土手の内面だけ石で覆つた石葺きが多い。

嶺岡東牧北側及び嶺岡西牧南側の野馬土手は土盛りが多く、嶺岡東牧南側、嶺岡西二牧北側は石葺き、嶺岡西一牧北側は砂利盛りの野馬土手が多い。また、嶺岡東牧南側および嶺岡西二牧北側で、石切丁場近辺につくられた野馬土手に石垣が認められる(写真1)。嶺岡東牧南側の石垣は蛇

紋岩、嶺岡西二牧北側の石垣は砂岩を用いている。石垣に用いている石の内、矢穴が残されているものがある。この矢穴の位置から、野馬土手に用いている石は割つて捨てた部分を活用しているもので、野馬土手をつくるために石を切つたものでないことが明らかになつた。

(二) 柱木牧の野馬土手

丘陵斜面につくられている嶺岡山の牧の野馬土手と異なり、柱木牧は山塊の頂部を結ぶ尾根線付近に野馬土手がつくられているため、嶺岡山の牧とは異なる形態の野馬土手がつくられている。柱木牧の野馬土手を形状から分類する



写真1 嶺岡二牧の石垣状野馬土手

と以下の通りである（図8）。

①嶺岡型・山地斜面に野馬堀を掘り、斜面下位にその土を盛つて築いている野馬土手。

②柱木1型・尾根上に形成された野馬土手で、野馬堀が中央にあり二重土手をなしているもの。多くは、放牧地の外側との境に築かれた土手が高く、牧内面側の土手が低いが、両土手の高さが同じこともある。

③柱木2型・尾根上に築いた、野馬堀が無く土手のみの野馬土手。野馬土手の両縁に狭い平坦面が存在することが多いが、平坦面がともなわない土橋状の土手も見られる。

④柱木3型・尾根線から牧の内側をカットして平坦面をつくり、掘つた土を外側との境に積み上げた野馬土手。盛り上げて土をつくる柱木1型と尾根をカットして土手をつくり出す柱木5型との中間形態。

⑤柱木4型・尾根線から牧の内側の斜面をカットして平坦地をつくり、内側に土を盛つたもの。削り残した尾根線が土手の役目をなし、内側に盛つた土手との間が野馬堀の役目をなす。

⑥柱木5型・柱木4型と同様、牧の内側を削平し、尾根を削り残して土手としたもの。内側に土手を形成しないためカットした部分は平坦面で、野馬堀がつくり出されていない点で柱木4型と異なる。

(7) 柱木6型・野馬堀だけで野馬土手を確認できないタイプ。谷線に付くことが多い。

以上、柱木牧の野馬土手は、野馬堀とセットとなつておらず、積み上げて土手をつくるだけではなく、削り残して土手がつくられている点が注目される。当初、削り残したタイプは山道と考え野馬土手とは見ていなかつたが、盛り土して土手をつくったタイプの野馬土手間に挟まれていることから、これを野馬土手と認識するところとなつた。むしろ柱木牧の野馬土手は、牛馬が外に出ないようになつておく施設にとどまらず、馬捕り馬

から牧外に馬を運び出す道など山道としての性格を有していたものと考えられる。

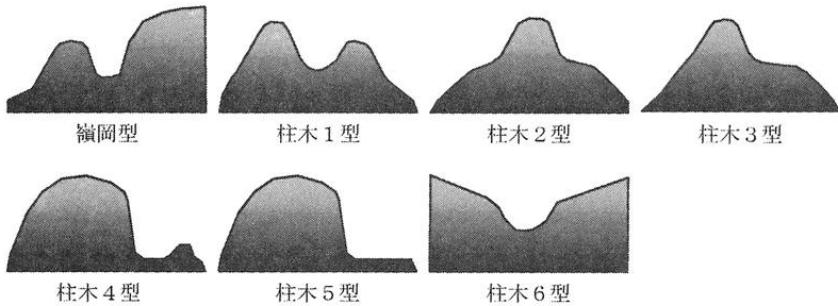


図8 柱木山の野馬土手

五 野馬土手の構築年代

嶺岡牧では、二〇一三年一二月まで野馬土手に対する発掘調査がまったく行われていなかつた。そのため、現在残されている野馬土手はいつ構築されたものかを検討することができなかつた。昨年行われた野馬土手の発掘でも、縄文時代の遺物が出土したもの、該期の遺物は出土しなかつた。そのため、今日なお、出土遺物から嶺岡牧の野馬土手を構築した年代を定めることはできない。

野馬土手から遺物はまだ検出されていないが、野馬土手に積み上げている石から、構築年代に迫ることができる。

嶺岡山は、石無し県といわれる千葉の中につけて珍しく石を産出する。嶺岡牧内に石切丁場跡が残されているが、石を使つた野馬土手にも多くの矢穴石（写真2）を認めることが出来る。この矢穴石の矢穴から野馬土手の構築年代を推定することができる。

石を割るための楔を入れる矢穴の形、大きさは、技術の進歩とともに変化する。嶺岡牧の矢穴石の矢穴は、台形状をしており、矢穴の横幅は一二cm前後である。これは、寛政から文政にかけての時期の矢穴とみることができる。



写真2 野馬土手に積まれた矢穴石

円形のドリル痕がついた石が石垣や石葺きの石として組み込まれていることが無いことから、明治期に入つてからつくられた土手では無く、一七cmを越える幅の矢穴がみられないことから、寛永期まで遡るものでないことが分かる。以上から、現在見られる嶺岡牧の土手は、江戸幕府直轄牧の整備を進めた一代将軍徳川家斉の治世時に築いたものと考えられる。

は、野生と言つても差し支えない状態で馬を放牧している場所と考へられていた。しかし、野馬土手の分布調査により、少なくとも江戸後期の嶺岡牧はこうした理解と違うことが明らかになつた。自然交配では品種改良ができないため、村落毎に仮囲いつくつて品種管理を行つていてこと、村落単位に草地を区画し、管理型の飼養管理を行つてきたこと、牧の範囲を厳密に定めていたことなど、現在の管理型放牧と類似した飼養様式であることが、今回の調査で浮かび上がつてきた。このことにより、下総台地より土壤生産力が劣る房総山地にありながら、土地面積当たりの馬の飼養密度が佐倉牧の二倍の水準を維持したものと考えられる。

また、一口に嶺岡牧と言つても、野馬土手の構築方法や野馬土手の立地から一様でなく、山道的な性格を持つた柱木牧、嶺岡西牧南側と、野馬土手・野馬堀が区画としての意味に限られているそれ以外の嶺岡牧とでは、同じ野馬土手、野馬堀であつてもその機能が大きく異なることが明らかになつた。

同時に、野馬土手の石採掘のためでない広い石切丁場跡、数多い炭焼き窯跡の確認により、嶺岡牧内が幕府領として入るのが容易でない所でなく、周辺住民が比較的自由に入つて経済行為を行う場であつたことが明らかになつ

六 結語

「野馬土手」という言葉が示すように、江戸幕府直轄牧

た。

このように、常識で嶺岡牧経営を述べると実態とかけ離れることがわかつたという意味で、今回の野馬土手分布調査は今後の研究に大きく寄与したと考えられる。また、現地調査開始以前は、野馬土手に囲まれた区域は放牧地が広がつてゐるだけで、認識できる遺構は少ないと思われていた。しかし、今回の野馬土手分布調査及び馬の水飲み場分布調査により、仮囲い、石切丁場など明確な遺構が多数確認され、嶺岡牧の範囲全体を遺跡として認識することの重要性が再確認された。したがつて、今後、嶺岡牧遺跡の調査を進めることにより、より一層嶺岡牧の経営方式、及び地域生活に於ける嶺岡牧の意義に迫ることができるものと考えられる。

なお、本稿は、二〇一〇年度から二一二二年間に鴨川市の依頼で行つた嶺岡牧再生基礎調査、二〇一一年度から二〇一三年度に千葉県酪農のさとの依頼で行つた嶺岡牧調査の成果をとりまとめたものである。末筆ながら、共同研究者である鴨川市郷土史研究会の皆様、事務局の皆様に感謝の意を表する次第である。

参考文献

金木精一編（一九六一）『安房酪農百年史』、安房郡畜産農業組合。

小笠原長和・川村優（一九六七）『千葉県の歴史』、山川出版。

青木更吉（一九〇〇五）『嶺岡牧を歩く』、嵩書房。

小久賀隆史（一九〇〇六）『千葉県における牧跡の分布とその遺構』、『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』、千葉県教育振興財団。

小高春雄（一九〇〇六）『嶺岡牧』、千葉県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡、千葉県教育振興財団。

大谷貞夫（一九〇〇九）『近世史研究叢書二四 江戸幕府の直営牧』、岩田書店。

日暮晃一・佐藤誠・小笠原永隆・千葉いずみ（一九一二）『嶺岡牧再生マネジメント方式について』、日本考古学協会第七八回総会 研究発表要旨。